

修士論文（要旨）
2016年1月

高齢者における自己の多様性と喪失の受容との関係

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科
老年学専攻
214J6004
刈谷 亮太

Master's Thesis (Abstract)
January 2016

The Relationship between Self-Complexity and Acceptance of Loss in Older Adults

Kariya Ryota
214J6004
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor : Osada Hisao

目次

1 . 緒言	・・・	1
2 . 方法	・・・	1
1) 調査の対象者と方法	・・・	1
2) 調査内容	・・・	1
3) 分析方法	・・・	1
(1) 質的な分析	・・・	1
(2) 量的な分析	・・・	1
3 . 結果	・・・	2
1) 自己側面カテゴリー	・・・	2
2) 使用した変数の基礎統計量	・・・	2
3) 自己側面カテゴリーと喪失の受容の関係	・・・	2
4) 自己の多様性と喪失の受容の関係	・・・	2
4 . 考察	・・・	2
引用文献		

1. 緒言

高齢期における喪失への心理的適応について検討を加える必要がある。高齢期の心理的な適応の中で喪失の受容は重要な役割を担っており、その喪失の受容は自己の多様性によって促される¹⁾のではないであろうかと考えることができる。喪失の受容について、竹村²⁾は状況受容を提示している。状況受容は、高齢者に多く経験される喪失に対して自身の認知を変化させることで適応するという二次的コントロールを背景に持つ対処であり、高齢者の心理的適応の中に位置づけることのできる概念である³⁾ため、本研究での使用に適していると考えられる。また、自己の多様性について、自己が多様であることについて肯定的な立場をとる概念に自己複雑性がある^{4) 5)}。高い自己複雑性は、ストレスフルな出来事から生じる抑うつが、他の自己側面に影響を与えることを防ぐという自己複雑性モデル(Self-Complexity Model)が Linvill⁴⁾によって提示されている。自己複雑性はストレスフルな出来事を受け止める能力であるため、喪失の受容と関連が予測される概念であると考えられる。このように、自己の多様性と喪失の受容には関連が予想されるが、高齢者に有効であると予想される自己の多様性である自己複雑性についての研究は青年期を対象としたものが大半であり、高齢者を対象にした研究は見受けられない。そこで、本研究では、高齢者のもつ自己の多様性の性質を明らかにし、高齢者における自己の多様性と喪失の受容の関係を検証することを目的とした。

2. 方法

1) 調査の対象者と方法

東京都内の地域在住の高齢者を対象とした学習教室の参加者 173 名とした。調査期間は 2015 年 10～12 月であった。調査方法は無記名による自記式の質問紙を用いた留置法によるものであるが、一部の学習教室では、教室の都合により郵送法によって行った。最終的に本調査が完了した対象者は男性 47 名、女性 51 名、合計 98 名(回収率 71.6%、有効回答 56.6%)であった。平均年齢は 72.9 歳(SD=6.2)であった。本調査は 2015 年 10 月 13 日に桜美林大学研究倫理委員会の承認を得たうえで実施された(承認番号：15022)。

2) 調査内容

喪失の受容をとらえる指標として、状況受容項目²⁾を用いた。自己の多様性をとらえる課題として、Linvill^{4) 5)}の自己複雑性を測定する課題である特性語分類課題を用いた。また、自己の多様性をとらえる指標として、特性語分類課題の結果から算出した OL(Over Lap)⁶⁾を用いた。

3) 分析方法

(1) 質的な分析

高齢者のもつ自己の多様性の性質を明らかにするために自己側面の記述の分類を行った。方法は、安⁷⁾を参考にし、内容分析を採用した。さらに、質的な分析の結果得られた自己側面のカテゴリー(以下、自己側面カテゴリー)を反映した自己の多様性をとらえる指標として、自己側面カテゴリーの種類、カテゴリーごとの自己複雑性を算出した。

(2) 量的な分析

自己の多様性を表す変数(自己複雑性、自己側面カテゴリーの種類、カテゴリーごとの自己複雑性)と喪失の受容を表す変数(状況受容)を表す変数の基礎統計量を算出し、内的整合性、天井効果と床効果の検討を行った。天井効果と床効果の基準は、平均値±1SDが最小値、最大値を超えるとした。自己側面カテゴリーと喪失の受容の関係を検証するために、各自己側面カテゴリーを持つ人(以下、有り群)と持たない人(以下、無し群)ごとの喪失の受容を表す変数の得点を t 検定で比較した。高齢者における自己の多様性と喪失の受容の関係を検証するために、Pearson の積率相関係数を求め、自己の多様性を表す変数、基本属性(年齢、性別)を独立変数、喪失の受容を表す変数(状況受容)を従属変数にした階層的重回帰分析を行った。解析は統計パッケージ IBM SPSS Statistics ver.22 を用いて行い、有意水準はすべて 5%とした。

3. 結果

1) 自己側面カテゴリー

特性語分類課題によって 794 件の自己側面の記述から、28 個のサブカテゴリーと 8 個のカテゴリーが抽出された。抽出されたカテゴリーは、【現在の個人に関わる自己】(55.2%)、【人間関係の中での自己】(7.4%)、【家庭の中での自己】(5.4%)、【NPO、地域、ボランティア活動の中での自己】(5.0%)、【健康に関わる自己】(4.2%)、【好き嫌い】(10.7%)、【未来の自己】(10.4%)、【過去の自己】(1.3%)であった。

2) 使用した変数の基礎統計量

喪失の受容を表す変数(状況受容)の平均値は 15.26(SD=2.56)であった。Cronback の α 係数は.79 であった。天井効果と床効果の基準を平均値 \pm 1 SD が最小値、最大値を超えるとしたとき、自己の多様性を表す変数(自己複雑性、自己側面カテゴリーの種類、カテゴリーごとの自己複雑性)では、自己側面カテゴリーの種類(平均値 3.24, SD=1.40)、NPO、地域、ボランティア活動の中での自己の複雑性(平均値.54, SD=.49)において天井効果と床効果がみられなかったが、自己複雑性、自己側面の数、現在の個人に関わる自己の複雑性、人間関係の中での自己の複雑性、家庭の中での自己の複雑性、健康に関わる自己の複雑性、好き嫌いの複雑性、未来の自己の複雑性、過去の自己の複雑性においてはいずれも天井効果がみられた。

3) 自己側面カテゴリーと喪失の受容の関係

自己側面カテゴリーの有無による比較では、NPO、地域、ボランティア活動の中での自己が有り群の方が無し群に比べて喪失の受容得点が有意に高かった($t(96)=-2.59, p<.01$)。しかし、他の自己側面カテゴリーの有無による喪失の受容得点の有意な差は認められなかった(現在の個人に関わる自己： $t(96)=-.51, n.s.$ ；人間関係の中での自己： $t(96)=.27, n.s.$ ；家庭の中での自己： $t(96)=-1.01, n.s.$ ；健康に関わる自己： $t(96)=-1.07, n.s.$ ；好き嫌い： $t(96)=1.95, n.s.$ ；未来の自己： $t(96)=-1.57, n.s.$ ；過去の自己： $t(96)=-1.37, n.s.$)。

4) 自己の多様性と喪失の受容の関係

自己の多様性と喪失の受容の関連を検討するために、Pearson の積率相関係数を求めた。NPO、地域、ボランティア活動の中での自己の複雑性と喪失の受容の間に有意な負の相関が認められた($r=-.26, p<.01$)。次に、自己の多様性を表す変数である、NPO、地域、ボランティア活動の中での自己の複雑性、自己複雑性、自己側面カテゴリーの種類と、基本属性(年齢、性別)を独立変数、喪失の受容を表す変数(状況受容)を従属変数にした階層的重回帰分析を行った。NPO、地域、ボランティア活動の中での自己の複雑性の β が $-.28(p<.01)$ となった。また、model II, model IIIで自己複雑性、自己側面カテゴリーの種類、基本属性(年齢、性別)を加えた際の R^2 の増分は有意ではなかった。

4. 考察

本研究で抽出された自己側面カテゴリーは高齢者における自己の多様性の性質として成り立つと、先行研究^{8)・10)}との関係により考えることができる。今後の課題としては、特定の喪失体験をもつ高齢者など、さまざまな高齢者を対象として自己の多様性を検証することがあげられる。自己側面カテゴリーと喪失の受容の関係については、ボランティア活動などの **productive activity** と心身の健康の関連^{11)・13)}を反映したものと考えることができる。また、NPO、地域、ボランティア活動の中での自己のもつ多様性と喪失の受容の関連が示されたことは、NPO、地域、ボランティア活動を行うことにより自己への再認識が促され^{14)・15)}、結果として自己の多様性が高まる¹⁶⁾というメカニズムが生じている可能性が考えられる。最後に、NPO、地域、ボランティア活動の中での自己のもつ多様性と喪失の受容の関連についてであるが、この結果は自己複雑性モデル^{4)・5)}を一部支持するものと考えることができる。

引用文献

- 1) 竹村明子, 仲真紀子 : 身体や健康の衰退に調和するための高齢者の対処: 二次的コントロール理論を基に. 発達心理学研究, 24(2) : 160-170 (2013).
- 2) 竹村明子 : 現実を受容すること: 二次的コントロール理論の立場に基づく検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 53 : 215 (2011).
- 3) Heckhausen, J., Schulz, R. : A life-span theory of control. *Psychological review*, 102(2) : 284-304 (1995).
- 4) Linville, P. W. : Self-Complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*. 3 : 94-120 (1985).
- 5) Linville, P. W. : Self-Complexity as a Cognitive Buffer against Stress-Related Illness and Depression. *Journal of Personality and Social Psychology*. 52(4) : 663-676 (1987).
- 6) Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., et al. : The divided self: concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of personality and social psychology*, 64(5) : 834-846 (1993).
- 7) 安瓊伊 : 介護福祉士の専門性の構成要素の抽出: 介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述の内容分析に基づいて. 老年社会科学, 35(4) : 419-428 (2014).
- 8) Monge, R.H. : Structure of the self-concept from adolescence through old age. *Experimental Aging Research*, 1 (2) : 281-291 (1975).
- 9) 下仲順子, 村瀬孝雄 : SCT による老人の自己概念の研究. 教育心理学研究, 23(2) : 104-113 (1975).
- 10) Freund, A. M., Smith, J. : Content and Function of the Self-Definition in Old and Very Old Age. *Journals of Gerontology*. 54B (1) : 55-67 (1999).
- 11) Omoto, A. M., Snyder, M., Martino, S. C. : Volunteerism and the life course: Investigating age-related agendas for action. *Basic and applied social psychology*, 22(3) : 181-197 (2000).
- 12) Michael, Y. L., Berkman, L. F., Colditz, G. A., et al. : Living arrangements, social integration, and change in functional health status. *American Journal of Epidemiology*, 153(2) : 123-131 (2001).
- 13) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二 : ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. 日本公衆衛生雑誌, 52(4) : 293-307 (2005).
- 14) Luoh, M. C., Herzog, A. R. : Individual consequences of volunteer and paid work in old age: Health and mortality. *Journal of Health and Social Behavior* : 490-509 (2002).
- 15) 藤原佳典. : 高齢者によるボランティア活動の意義と心身の健康に及ぼす影響-productivity としての理論から実践的課題へ-. 秋田県公衆衛生学雑誌, 4(1) : 12-20 (2006) .
- 16) 川人潤子, 堀匡, 大塚泰正 : 大学生の抑うつ予防のための自己複雑性介入プログラムの効果. 心理学研究, 81(2) : 140-148 (2010) .